

高瀬川だより

NPO法人京都高瀬川繁栄会報
編集人 田村佐起三

〒六〇四一八〇〇一
京都市中京区木屋町通三条上ル
電話 (〇七五) 二二二二・一八二八

《日の丸とは？日本人としての誇りは？》

国を代表して海外遠征中に、日の丸を標記された正規ユニフォームを着て歓楽街へ行き、日本国代表を取り消されたスポーツ選手…。

私が西独メッセ・インターストッフ・テキスタイル・コンペに日本繊維新聞社とGAP誌の推薦を受け出展したのは1980年でした。数十か国の代表が一堂に会し各々自己ブースでテキスタイルを競合しました。会期後半に日本人の同朋ブースには日本の国旗が標記無く、他国のブースには全て国旗が標記されている事に気付くその瞬間に全身の血の気が引いた事を未だに思い出し「恥ずかしかつた」思いが蘇ります。自分自身の意識の低さや無知、自覚の無さに腹が立ったことをばねに、翌年からプラザ合意までの5年間通算10回、日本人としての誇りを問いかけながら、海外から日本を見つめる機会を得て、世界の貴重な体験を戴き勤め上げました。

京都国立近代美術館 1月12日～2月24日

《世紀末ウィーン・グラフィックコレクション》

当館は2015年に世紀末ウィーンのグラフィック作品を収蔵しました。このコレクションはアパレル会社の創業者、平明陽氏が蒐集したものです。1897年の分離派結成から1914年の第一次世界大戦勃発までのウィーンではクリムトやホフマンらを中心に、新しい時代にふさわしい芸術としてデザインがあり方が模索され、数多くの素晴らしい成果が生まれました。中でもグラフィックの分野は印刷技術の発達や雑誌メディアの隆盛を背景に新しい芸術の動向を人々に伝え社会に浸透させる重要な役割を担いました。本展では300件にのぼる膨大なコレクションの全貌を紹介するとともに同じく平明氏旧蔵のルクシュによる石膏彫像と貴重なロースの家具一式をも加え世紀末ウィーンの息吹と魅力をお伝えします。

私の本棚 おすすめの一冊 粉川 剛

《安倍政権の「移民政策」実現なら日本の若者の賃金は上がらない／窪田順生ダイヤモンドオンライン》

《安倍政権が進めている「外国人労働者の受け入れ拡大」は、どう見ても「移民政策」である。人手不足にあえぐ経営者たちは大喜びするだろうが移民が増えれば若者の賃金は上がらないまま。「移民政策」という本当のことを国民に伝えず「外国人労働者」とマイルドな表現をして移民政策が進んで行くのを許しているのだろうか？と窪田氏。労働力の希少性が高まれば賃金が上昇し日本が苦しむデフレ脱却の足掛かりとなる。外国人を入れないければ《人手不足で企業がバタバタと倒れていくぞ、という人がいるがそれは低賃金労働を前提とした昭和のビジネスモデルを引きずっていることが原因だ。本来「生産性向上」を掲げるのなら経営者は安い労働力をとれただけ確保できるかがキモみたいな考えは捨てて高い賃金を支払っても経営が成り立つビジネスモデルをつくらねばならない》と述べている。

土口哲光和尚の説法

《笑いは健康のもと、福を呼ぶ》

歳末は気ぜわしく、落ち着かない。今年もいいこともあれば、辛いこと悲しいことにも出遭っている。人から喜びやいいことも戴くが、逆に煮え湯を飲まされて災いを被る場合もある。とかく浮世は人間の関係が密に絡んで問題のおおむねはこの一点に絞られてくる。思い通りには行かないものだ。そこで「人間万事塞翁が馬」と心得て「災いを転じて福となす」の信条で、道なき道を探って通る覚悟で歳の瀬を越したい。

「呵々大笑」とは、口を大きく開き、大声で笑うことを古来から伝わった。「笑う門には福きたる」笑いは複雑な人間関係を突破し、何よりも自分の健康の源になる。そして「笑面垂慈悲」―笑い顔(面)は慈悲(いつくしみ)をほどこすこと。

季節の家庭料理 田村 真紀

《一月 春菊とエビのジエノベーゼ風パスタ》

《作り方・四人分》

パスタ三百グラム(表示より一分短めに茹でる)。むきえび二十個・にんにくみじん切り小匙一・オリーブオイル大匙六 ★春菊百五十グラム(ざく切りにしてラップし、レンジで一分半加熱)・松の実三十グラム・オリーブオイル大匙七・粉チーズ大匙四・にんにく半カケ・塩小匙一 ★のソースの材料を全てフードプロセッサーで滑らかになるまで攪拌する。フライパンにオイルとにんにくを入れ焦がさないよう弱火でゆつくり炒める。よい香りがしたらエビを加え、強火で手早く炒める。パスタの茹で汁をお玉に三杯分加えて沸騰させ、茹でたパスタを加えエビの旨みを絡める。★のソースを入れしつかり絡ませる。

つれづれの記 山崎 辰巳

《金儲けよりモノづくり》

日本研究家でもある英国の社会学者で先日亡くなったロナルド・ドーア氏(九十三歳)が「虚業より実業」「金儲けよりモノづくり」という言葉を残している。

また「金融が乗っ取る世界経済」と警告を発し、日本特有のモノづくりや働くことの意義を唱えてきた親日家だ。我々の周りは今ビットコインや種々の金融商品、携帯やスマホ割引などで消費者を煽り立て、労せずして儲ける風潮が蔓延している。そんな日本にドーア氏は幻滅し、失望もしていた。

町工場の手に汗して働く姿や老舗に見る相伝の愚直なモノづくりこそ日本を支えてきた特質だと唱えている。今いちど日本人特有の勤勉なモノづくりの姿勢、顧客本位のサービス精神を見直したいものだ。